

## **Potential for Collaboration in Remote Multilingual Spaces** **—A case of Communication And Learning Experiences Based on the Africa-Seika** **Students Exchange (CALEBASSE) Project—**

FUJIEDA Ayako, NAKAO Sakiko, AMO Kae, YOO Soo kyung,  
YOSHINO Toshiaki, OOSHIMO Daisuke, URUSHIMA Flores Andorea

---

Although young people in Africa are increasingly interested in Japanese society and culture, many Japanese students, including those at our university, remain unfamiliar with the continent. In a time when there is a need for a new generation of international education, especially in situations where opportunities for exchange between young people from both regions, such as in Africa, are extremely limited, it is crucial to find ways to cultivate curiosity about different cultures and encourage mutual understanding.

Since the academic year 2021, the authors have been researching to promote interest and understanding between Japanese and African students. The objective is to generate new opportunities for education that involve both online and offline interactions between our university students and students from three universities in West African countries (Burkina Faso, Cameroun and Senegal). This paper highlights and examines the insights derived from these experiences. An increasing number of students from various faculties on our campus are becoming interested in Africa. Remote exchange opportunities are a great chance for those interested in connecting with African students for the first time. Through the utilization of various methods such as communication through pictures, translation apps, and the use of multilingual environments (Japanese, French, English), Students have developed the ability to communicate independently. This has led to deepening mutual understanding and interest through the creation of multifaceted opportunities and methods for exchange, including two-way gift exchanges and everyday interactions via social media. Moreover, faculty-led exchange programs have the potential to evolve into student-led exchanges. This will assist in tackling the ongoing issue of international and multicultural understanding in Japanese universities.

# 遠隔多言語空間における協働の可能性

## ～西アフリカ諸国の大学との学生交流 (CALEBASSEプロジェクト)を事例として～

藤 枝 絢 子 FUJIEDA Ayako

阿 毛 香 絵 AMO Kae

吉 野 利 章 YOSHINO Toshiaki

アンドレア フロレス ウルシマ Andrea Flores Urushima

中 尾 沙季子 NAKAO Sakiko

ユウ・スギョン YOO Soo Kyung

大 下 大 介 OOSHIMO Daisuke

### 1. はじめに

「国際化」が進んでいる現代において、多くの日本の若者たちの関心は相反して海外に向いておらず、海外留学への関心も決して高くない(内閣府, 2018)。更に2020年からの新型コロナウイルスの流行は、若者の「海外離れ」に拍車をかけた。しかし、今後も国内での外国人人口は増え続ける見込みがあり、同時に海外で日本の新たな世代が活躍していく場面も増えていくであろうと考えられ、新たな世代の国際教育が必要とされている。

なかでも、高齢化する欧米や日本などの先進国に対し、若い人口を抱え、資源や高い経済成長率を特徴とするアフリカ大陸へは、2000年代初頭より中国と並び世界からの注目が集まっている(平野, 2013)。しかし、国際的な関心にもかかわらず、日本におけるアフリカに関する報道は極めて限定的であり、本学を含む多くの日本の若者にとってアフリカはいまだに未知の大陸であるといえる(Oishi 他, 2021)。それに対し、アフリカに暮らす若者は、日本社会や文化に対し高い関心を向けている。特に、戦後の経済復興に関しては、1990年代より開発・成長のモデルととらえられ、参照されてきた<sup>(1)</sup>。1990年代の経済発展と国際社会からのプレッシャーを背景に大きな盛り上がりを見せた日本のアフリカ政策や支援事業は、それから20年たった今、下火になっていると言わざるを得ない(佐藤, 2007)。しかし、「大きな物語」としての開発がある種の失敗を経た今こそ、若い世代を中心に、より身近なレベル、草の根レベルでの人とひととの交流が重要になっているのではないかと。日本、アフリカ双

方で新たな世代、新たな方法での相互理解が必要とされる現在、特にアフリカのように両地域の若者同士の交流の機会がきわめて少ない状況において、馴染みのない文化への関心を醸成し理解を促進する方法を模索することが求められている。

新型コロナウイルスの世界的流行によって、大学においては留学生の受け入れ、学生の海外派遣など国際交流が大幅に制限された。一方、海外の大学の授業を遠隔で受講する、海外の学生とオンラインで交流するなどの活動が活発化し、これまで「対面」「渡航」が中心となっていた国際交流に新たな可能性が示されてきた(藤枝他, 2023)。オンラインでの学習や交流機会は、コロナ禍における代替案となるだけでなく、実際の渡航に比べ経済的や時間的な制約が少なく、また海外に馴染みのない学生にとっても参加しやすい機会であり、新たな国際交流の方法としての可能性を示してきた。日本とアフリカは地理的にも遠く、双方の大学生の接点は限られる状況において、学生が参加しやすいオンラインでの交流の場を創出することは、馴染みのない文化への関心を喚起し、相互理解へのきっかけとなりうると考える。

そこで、筆者らは、オンラインでの交流の可能性を模索することを目的とし、コロナ禍の海外渡航が制限された2021年度～2023年度において、京都精華大学の学長指定課題研究「遠隔での文化理解の場の創出に向けて～西アフリカ諸国の大学との学生交流を起点として～」(2021年度)、「遠隔多言語空間における協働の可能性～西アフリカ諸国の大学との学生交流(CALEBASSEプロジェクト)を起点として～」(2022年度)の一環として、西アフリカの3大学と京都精華大学の学生とのオンライン交流事業を

実施した。本稿は、本交流事業における遠隔多言語の環境や本学の～交流といった取り組みの成果について報告すると同時に、オンラインを通じた国際交流の課題と可能性について考察するものである。

## 2. 交流事業の概要

### 1) 背景

京都精華大学では、2020年度よりアフリカ・アジア現代文化研究センター(CAACCS)を立ち上げ、2021年度より国際文化学部を設置し、海外の文化や社会背景を深く理解し、創造的な社会への貢献ができる若い世代を育てることを目指している。本稿で対象とする交流事業の発端となったのは、2021年3月18日に京都精華大学で開催したWEBシンポジウム「西アフリカ諸国と京都精華大学の教育・研究交流の模索」での提案にあった。本シンポジウムは、2020年4月のアフリカ・アジア現代文化研究センターの立ち上げに際し、これまで教育分野において日本とのつながりが薄かった仏語圏西アフリカを対象に、研究・教育分野の連携を促進するため、セネガル、マリ、ブルキナファソ、カメルーンの協定機関をはじめとする大学や研究所の代表者を招いて行われたものである。シンポジウムでは、近年のアフリカ地域発展、アフリカ大陸内外にて活躍する新しい世代のアフリカ出身者の文化、社会、経済的な影響、エネルギー産業、IT業界、都市工学や環境学などの分野におけるアフリカ発のモデルの発展などが示されるとともに、日本と西アフリカの連携、ひいては今後の京都精華大学と西アフリカ諸国の教育機関との交流の新たな展開について意見が交わされた。こうした議論の中で、学長や組織の代表者たちの話し合いではなく、それぞれの大学から学生たちを募り、京都精華大学の学生とオンライン交流の機会を持つてはどうか、との提案がなされた。

### 2) 西アフリカの参加大学

上記提案を受けて、本学の教員のネットワークを活用し、京都精華大学の学生との交流に関心を持つ西アフリカ地域の大学を募り、3大学(ガストン・ベルジェ大学(セネガル)、ジョゼフ・キ＝ゼルボ大学(ブルキナファソ)、マルア大学(カメルーン))とオンライン交流事業を開始するに至った。これらの3大学はいずれも域内で高い教育水準を有し、国際化の一環として新しい学術連携先となる本学との交流の促進に積極的であった。渡航が制限されてい

たコロナ禍でのプロジェクトの起動に際して、各参加校においてプロジェクトの運営を担い、オンラインで円滑な連携体制を築くことのできる教員の存在が不可欠であったため、本学教員がこれまでの研究活動のなかで築いてきた人脈を活かし、運営チームを形成した。以下、参加3大学について概観する。

ガストン・ベルジェ大学(セネガル)は1990年に設立された総合大学・大学院で、セネガルの国公立大学として植民地時代より古くから教育実践の場であったダカールのシェク・アンタ・ジョップ大学の次に設立された国公立大学であり、農学や現地の需要に応じた学部も備え、海外の提携機関も多く、高い教育水準を有する大学である。本プロジェクトには主に文明・宗教・芸術・文化学部(CRAC(Civilisation Religion Art Culture))の教員であるフレデリック・ルポー氏および学生が参加した。

ジョゼフ・キ＝ゼルボ大学(ブルキナファソ)は1974年に設立された総合大学・大学院で、ブルキナファソで最大かつ、最も評価の高い大学である。本プロジェクトには社会学部教員のアブドゥライ・ウェドラオゴ氏を中心に同学部3年生から修士課程、博士課程の学生まで計19名が参加した。ウェドラオゴ氏の専門は教育社会学であり、新たな教育ツールの開拓・検討という観点から本プロジェクトへ関心を寄せており、運営体制の構築に際し、助力を得ることができた。

マルア大学(カメルーン)は2008年に設立された、師範学校を含む総合大学・大学院である。歴史学部教員のウスマヌ・アダマ氏はチャド盆地の宗教、民族、国際関係を専門とし、本学のほかにも国立民族学博物館や東京外国語大学現代アフリカ地域研究センターなど日本の研究機関と積極的に連携し活動を展開している。本プロジェクトへは日本での滞在歴があるアダマ氏を中心に、日本への関心が高い学生を構成員として結成している日本クラブ32名の学生が参加した。

### 3) 交流事業の目的と活動概要

オンライン交流事業は、2021年度および2022年度の2年に渡り学長指定課題研究から助成を受け、本学学生と西アフリカ諸国の大学の学生の多様な文化への興味や理解の促進を視座に、双方の教職員・学生の参加による遠隔での相互交流の実践を通じて、下記を模索することを目指した。

・日本の学生たちにとって馴染みの薄い地域に対する関心をどのように醸成するのか、複数の専門領

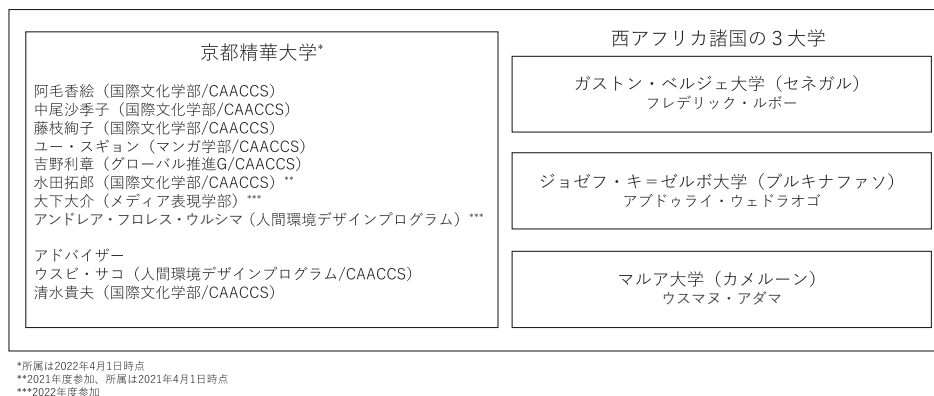


図1. 運営体制

域を持つ学生・教員が連携することで、どのような相乗効果が得られるのか

- ・学生らの共通言語（日本語・フランス語・英語）の能力に限られるなか、どのようなコミュニケーションが可能か、また、どのような支援体制が必要であるか
- ・遠隔での文化理解を促進するために、オンライン（バーチャル空間）とオフライン（物質空間）をどのように接続させることが効果的なのか

オンライン交流事業は、本学のCAACCSに所属する教職員6名が中心となり立ち上げ、西アフリカ3大学の担当教員3名とともにオンライン会議やメールにて双方の学生が関心を持ちうるテーマや内容を提案し、協議を重ねながら具体的な企画を進めた(図1)。本学においては、西アフリカを専門とし伝語に堪能な教員に加え、異なる学部や専門性を有する教職員が参加することにより、学生の関心に即した多様な各交流イベントや円滑な運営を目指した。

交流事業における主な活動を表1に示す。2021年度には、京都精華大学と各3大学との2大学間の交流ワークショップ(2021年7月)および2大学間のギフト・エクスチェンジ、4大学オンライン合同ワークショップとテーマ別ワークショップを開催するとともに、日常的な交流をはかるためのメッセージアプリ(WhatsApp)によるテーマ別プラットフォームを形成した。2022年度は、活動内容の多様化、学生主導の活動の促進をはかるため、ローカル言語のオノマトペから想像するイメージを描きながら各国のオノマトペを学ぶ「アフリカのオノマトペを学ぼう!描こう!」(2022/7/7)、マルア大学のウスマヌ・アダマ氏をむかえた「タブーに挑戦する?!日本とアフリカの多文化クロストーク」(2022/12/14)、学生を交えて企画した公開イベント「私たちの本当を知って見学SHOW!!」(2023/2/2)を開催した。次章

にて、これらの活動展開についての詳細を示す。

表1 活動リスト

時期	活動内容
2021年	
4月~6月	西アフリカ諸国の大学とプログラム内容を検討 <b>学生募集</b>
7月	<b>オンライン交流ワークショップの開催(4回)</b>
8月	西アフリカ諸国の大学とオンライン交流会の振り返り 西アフリカ諸国の大学と今後の交流展開の意見交換
9月~11月	<b>オフライン交流(ギフト・エクスチェンジ)</b>
12月	本学の学生との意見交換会
2022年	
1月	<b>4大学オンライン合同ワークショップ</b>
2月	メッセージアプリ(WhatsApp)によるテーマ別プラットフォーム形成
3月	<b>テーマ別オンラインワークショップ</b> 学内での学生と教員による振り返り
6月	「アフリカのオノマトペを学ぼう!描こう!」
12月	「タブーに挑戦する?!日本とアフリカの多文化クロストーク」 本学の学生との意見交換会
2023年	
2月	「私たちの本当を知って見学SHOW!!」

### 3. 交流事業における活動展開

パンデミック下の国際交流の可能性の模索を起点とした本プロジェクトは、同時に二つの課題に直面していた。すなわち、遠隔での交流に適した活動内容やコミュニケーション方法を構築すること、また、異なる文化背景を有し、同じ言語を介してコミュニケーションすることが多くの場合難しい学生同士のグループの交流に適した多言語環境と、言語を超えたコミュニケーションの可能性を検討することである。オンラインでのコミュニケーションツールの教育現場への導入が行われた初期の段階からはじまった交流は当初、それらのツールを駆使し、言語を介した交流の活性化を目指すものであった。一方で、そのようなコミュニケーションを通して関係性が確立されていくなかで、より広く五感を活用し、言語を介さない交流の可能性が模索されるようになっていった。以下では、言語を介したコミュニ

ケーションを中心に行われた交流と、非言語の手段を介して行われた交流がそれぞれどのようなものであったかを詳述するが、両者は独立して発展したわけではなく、同時に進行することで、より多角的なコミュニケーションを可能にし、交流を促進したといえる。

### 1) 言語を介したコミュニケーションと活動展開

オンラインツールを利用した遠隔での交流は、時間距離を消滅させる一方で、物理的な距離は保つという特徴がある。一定の距離が保たれることは、一見すると円滑な交流の障壁となりそうに思われる。しかし、遠距離での移動経験が少ない者にとっては、「遠い」と感じる世界のひとびとと交流するにあたって、自分の環境を大きく変えずに相手にアクセスができる状況は、交流の心理的障壁をさげる効果がある。パンデミック下における制約は、オンラインツールの新たな可能性を見出す契機となった。一方、このような新しい試みを支え、交流の場を構築していくにあたっては、比較的綿密な意思疎通を図ることが求められ、言語を介したコミュニケーションを中心に交流が進められた。さらに、異文化体験よりも、同世代の交流であることに重点を置いた結果、参加者間で共通する関心を見つけ、コミュニケーションを図るという方法が取られた。

#### ① オンライン交流ワークショップ

プロジェクト初期は、交流の体制を確立することに重点を置いた活動を行った。参加校によって、既存のグループを母体として活動が行われたケース(カメルーン、ブルキナファソ)と、本プロジェクトの募集にあわせて新たにグループが形成されたケース(セネガル、日本)があった。前者のケースは、交流の基盤を形成するさいに有効であったのに対し、後者のケースでは、アフリカ、日本、双方において、専攻や学年を超えて多様な背景をもつ学生

の参加を可能とし、プロジェクトの広がり担保するものとなった。

交流の初段階においては、可能な限り相手の言語を用いて自己紹介を行い、自分のコミュニティ(大学、地域、国など)を互いに紹介することで、既知の内容を相手の言語で言語化していく作業を行った。オンラインでの言語を介した交流は、障壁が高いように思われたが、互いの言語を手探りで用いたり、パワーポイントなどのツールを駆使したり、自らが演奏できる楽器の演奏を披露するなど、言語を介さずに視覚や聴覚にはたらきかけるコミュニケーション方法を模索する契機ともなった(図2)。それぞれが自らの好きな食べ物や、自分の出身地などについて、写真を中心に相手に見せ、説明する努力をしたことで、参加したアフリカ人の学生から「どのような食べ物か」などの質問も引き出すことができ、視覚的な情報によるコミュニケーションが交流に大いに役立った。

またオンライン接続中は、同時多発的なコミュニケーションを円滑にするため、チャット機能を利用して、教員が逐次通訳を行っていたが、これと並行して学生たちが翻訳アプリを介してチャット機能を利用するようになっていった。このように、実際に交流の機会を前にすると、参加者たちが自発的にさまざまなコミュニケーション手段を見出していくことが明らかになった。

#### ② メッセージアプリを活用した交流プラットフォームの形成

交流の次段階では、初段階で発掘された多様な手段を用いながら、コミュニケーションの内容を深化させ、その持続性を追求することが目標とされた。オンラインの同時双方向の交流は、参加国間の時差や参加校の時間割を考慮した日時の設定が必要となり、参加者が多い場合は各自の発言時間も限られるというデメリットがある。これを超克する代替案と



図2. オンライン交流会の様子：楽器の演奏(左)と多言語での紹介(右)

して、プロジェクト参加者が各自のタイミングで発言ができるほか、音声、映像・画像などのツールも利用でき、翻訳アプリを介した言語での交流が可能となるSNSの利用が提案された。コミュニケーション内容の深化の観点から、参加者の関心にしたがって3つのテーマ（ひと—Human、表現—Expression、聖なるもの—Religion）が定められ、テーマごとにWhatsAppグループが設置されることとなった。グループは参加者の増減を随時可能にするため、学生の入学や卒業といった動きを超えて断続的な交流のプラットフォームを確立することができた。

WhatsAppグループの設置は、教員主導で企画・設定してきた交流の枠組みを、次第に学生主導のものへと移行していくためにも有効であった。また、グループが設置され、常時開かれたコミュニケーションの場が存在することで、単発的な同時双方向型の配信交流を行うさいにも、その前後の自由な発言の活性化につながり、両者の交流において相乗効果を得ることができたといえる。



図3. 多言語での文化紹介と情報交換（表現グループ）

### ③ テーマ別オンラインワークショップへの展開

オンラインを通じた交流を通し、上記で紹介したような、自己紹介を中心とした交流から、一部の学生たちの間で交流が進むと同時に、勉強会や授業を通してさらにそれぞれの文化や社会について理解を深めようという試みがなされた。この、第二段階の交流においては、最初の自己紹介の回の経験から、全ての参加者を集めると大人数になり全ての参加者が発話するのが難しく、また通訳の時間も含めると

交流より聞いている時間が長くなってしまいうことがわかったため、上記のテーマグループごとに特に交流が可能な大学に絞り、2023年1月～2月にかけてテーマ別オンラインワークショップを開催した。

例えば、上述のWhatsAppグループのうち、「ひと」をテーマとしたグループのなかから、少人数でテーマを掘り下げるかたちでのオンライン（同時双方向型）の勉強会の要請があった。おりしも2022年1月にブルキナファソでクーデタが起きた直後であったことから、ジョゼフ・キ＝ゼルボ大学のウェドラオゴ氏から、クーデタの背後にある西アフリカ地域におけるテロ攻撃を、リビアでの内戦や、サヘル地域全体の動きと結びつけながら解説するとの提案があった。交流を通して身近になりつつあった地域のひとびとが直面する状況と、より広範な地域的背景について、具体的な経験も踏まえた現地からの報告は、本学の学生にとっては大きな刺激となったようであった。

その他の勉強会でも、本学の学生からは、自身の研究テーマや、趣味、関心についてなど、全体テーマに沿って、発表を準備し交流を行った。例えば、「表現」テーマの勉強会では、マンガ学部の学生が自身の描いたイラストレーションを見せながらそれを取り巻く文化について紹介したり、デザイン学部ファッションコースの学生が卒業制作の作品について話したりといった様子が見られた。アフリカの大学生からは、教員の指導のもと準備されたパワーポイントのスライドを使い、分担して自国の文化や教育システムなどについて詳しい説明があった。こうした説明は、現地の教員が指導し、上記で設定したそれぞれのWhatsAppグループのテーマに応じて、現地の宗教性についても例えばキリスト教、イスラム教、異なる伝統宗教など、分担者を決めてそれぞれが自身の民族や文化に近い内容を発表していたり、自らの研究テーマに近い内容を発表していたりといった工夫がみられた。これは、それぞれのアフリカの参加大学の学生たちの多くが、修士課程以上の大学院生だったため、対話したい内容がより学術的なものだったことが理由だと考えられる。こうした学年レベルに応じた関心の違いはあったが、本学の学生にとってはアフリカにおける異なる民族文化や宗教、政治や教育システムなどのテーマに詳しく触れるきっかけとなった。

発表内容はかなり専門的なものも含まれていたため、発表中は本学の教員がZoomのチャット機能を利用したり、あるいは直接口頭にて逐次通訳を行っ



図4. 多文化クロストーク：アダマ氏による講義（左）と現地の学生による発表とチャットによるコメント（右）

たりした。こうした発表の後には、日本とそれぞれのアフリカ地域の学生たちから多くの質問があり、通訳を利用したり、それぞれの学生がチャットの翻訳機能などを活用して直接質問や答えを書き込んだりしながら交流する様子が見られた。

#### ④ 多文化クロストーク

2023年12月には、コロナによる移動制限の緩和に伴い来日していた本交流事業のマルア大学の担当教員であるウスマヌ・アダマ氏を本学に招き「タブーに挑戦する?! 日本とアフリカの多文化クロストーク」を開催した。本イベントは、国際文化学部グローバルスタディーズ学科の専門教育科目である「フランス語圏のメディア」の授業と連動を図るとともに、学内で関心がある学生、教職員にもアナウンスし、日本側の会場には同授業の受講生を含む学生15名、教員5名ほど、オンラインでマルア大学からも10名ほど、計30名ほどが参加した。

はじめにアダマ氏が、『カメルーンと日本におけるタブー：文化の違いを克服するために、規範にどう挑戦し・あるいは破るのか？文化の違いを克服するには？(Tabou au Cameroun et au Japon : Comment se douter des normes et/ou briser les tabous, afin de surmonter les différences culturelles?)』と題された講演を行った。次に、マルア大学の学生たちから、それぞれの民族や伝統社会、あるいは現代の社会におけるタブーについて発表があった。特にマルア大学は、イスラームが広く浸透しているカメルーン北部に位置しており、男女間のタブーや宗教的タブーに加え、伝統社会に根付いてきた年長者への敬意、年齢別のタブー（子供がしてはいけないこと）なども説明された。

興味深かったのは、日本への長期留学経験がある同氏が、詳しく日本の精神文化に由来するタブーについて説明を行った点である。参加者の日本人教員、学生からは、自国の文化についてアフリカの教

員の視点から丁寧に説明されたことで、改めて気づかされることが多かった、という意見が多く聞かれた。例えば曖昧、甘え、沈黙、頑張り、義理、謙虚、お見合い、良妻賢母、先輩、内と外、贈答などの概念について詳しく説明され、普段からあまり意識していない習慣や風習が、アフリカの観察者の視点からはどのようにみられているのか、という観点からも非常に興味深い発表となった。

発表後の交流では、日本とカメルーンにおけるタブーや伝統に意外に多くの共通点があるといった意見や、近代化していくなかで、現代の若者世代は一部のしきたりなどを守らなくなっている、あるいは守る必要がなくなっている、という変化についても議論された。発表部分は主に仏語だったため、逐次通訳に頼る形にはなったが、日本、カメルーン双方の学生や教員にとって、それぞれの文化や社会について改めて理解し交流する有意義な機会となったという意見が多く聞かれた。

## 2) 言語を介さない交流の展開

上述したように複数言語環境において、オンラインでのコミュニケーションツールや翻訳ツールの活用、日本と西アフリカの地域文化に精通する教員による解説や言語サポートにより、交流の発展がみられた。同時に、言語を介さない、教員の介在を最小限にした直接的な交流が模索された。

### ① ギフト・エクスチェンジ

オンラインでの異文化交流においてより有機的なコミュニケーションを図る手段の一環として、ギフト・エクスチェンジが企画された。2021年7月に開催した各大学とのオンライン交流会にて予告し、交流会の中で双方の興味を推察し、各々の大学でギフトを準備し、本学とアフリカの3大学の間で、ギフト・エクスチェンジを行った。本学からは学生自身が送りたいものや日本の文化を紹介する物を送ると

ともに、先方からは乾燥食品、布、工芸品などが届けられた(表2)。

表2. ギフト・エクスチェンジの中身リスト

西アフリカの大学から届いた物品(例)	日本から各大学に送った物品
<ul style="list-style-type: none"> <li>・布</li> <li>・アクセサリ</li> <li>・帽子</li> <li>・革製品</li> <li>・シアバター</li> <li>・乾燥食品(スンバラ)</li> <li>・パオパオの粉</li> <li>・ティーバッグ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寄せ書き(英語または仏語)</li> <li>・エコバッグ</li> <li>・石鹸</li> <li>・タオル</li> <li>・羽織</li> <li>・マスクングテープ</li> <li>・折り紙</li> <li>・Tシャツ</li> </ul>

オンラインのワークショップで顔を合わせるだけでなく、実際の物を交換することにより、これまで触れたことのない物の味、匂い、質感などを実感する機会が創出された(図5)。また、ギフトを選んだという当事者意識が芽生え、SNSへの活発な投稿や具体的な質問が増加した様子が見受けられた。さらには、本学においては、プロジェクトメンバーでない学生から布やその他の伝統工芸品を直接確認したいとギフトが保管されている事務室を訪ねる学生が数人おり、帽子・革製品についても製品の素材、その香り、香料の発色など興味深く観察する様子などもみられるなど、制作系学部を抱える本学においてはインターネットを通じて確認できる西アフリカ諸国が製造する布の、ユニークな柄とともにその質感を実際に体験できることは貴重なものになっており、波及効果も期待される結果となった。

コロナによる飲食などの制限が緩和された2023

年には、乾燥食品であるスンバラ(豆を煮て発酵・乾燥させたもの)を本学教員が学内で調理し学生にふるまう機会が設けられた。オンライン交流会、ギフト・エクスチェンジといったストーリーを経て日本の学生が食べやすいように調理されたアフリカの伝統料理は、多くの学生にとって初めてのアフリカとの接点となった。少なからず語学力を要するオンラインワークショップやSNSでのコミュニケーションは敷居が高いと感じる学生が多いなか、このようなギフト・エクスチェンジへの参加、またそこから発展する物質文化への接触は、より多くの学生にとって相手の文化への興味・関心を喚起する足掛かりとなることが確認された。

## ② 表現によるコミュニケーション

2022年7月に行われた「アフリカのオノマトペを学ぼう!描こう!」には、京都精華大学の学生10名とカメルーン、ブルキナファソ、セネガルの学生約20名が参加した。日本語と西アフリカのローカル言語のオノマトペをクイズ形式で紹介し、オノマトペのイメージを絵で描いて答えるという内容で構成された(図6)。

本イベントを企画した理由は、まず非言語コミュニケーションの可能性を探るためである。非言語といっても、オンラインのイベントで言葉を一切使わず交流することは難しいと判断し、最小限の言葉と



図5. ギフト・エクスチェンジの様子: 西アフリカの日常食材であるスンバラ(乾燥納豆)を観察する様子(左)、ギフトを受け取ったブルキナファソの学生の様子(右)

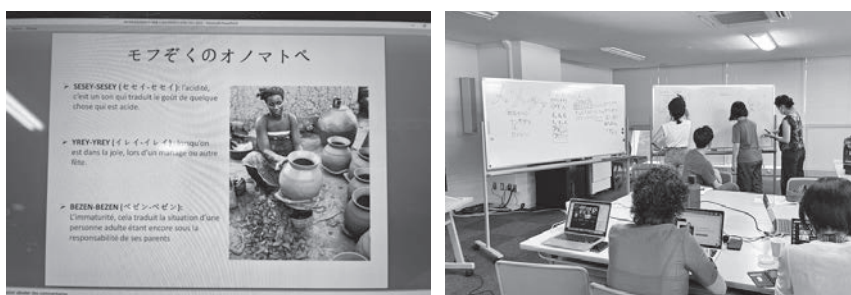


図6. 「アフリカのオノマトペを学ぼう!描こう!」の様子: アフリカのオノマトペに関する発表(左)とオノマトペを聞いてイラストを作成する様子(右)



絵を使った交流を企画することにした。そこで登場したのは「オノマトペ」である。オノマトペは他の単語や動詞に比べ多義的であるほか、感覚や情緒に関わる特殊な言葉であり、長い会話を介さなくても表現したいイメージや感情を伝えやすい。また、音や声をベースにしていることから、該当言語を知らない人にとってもその意味や背景にある心象を想像しやすい特徴がある。さらに、絵でオノマトペを説明することで、言葉では伝えきれない部分を説明できると期待し、企画を進めた。

一方で、本企画においては母語のオノマトペをお互いの言語の例と比較し、共通点と相違点を見つけてもらいたいという意図もあった。というのは、オノマトペは母語の話者が共有する感覚や情緒のイメージであり、母語の話者の間では当たり前のように受け入れられるイメージが、他言語話者には通じないこともあるということを理解して欲しかったからである。実際、参加した学生たちは初めて接する外国語のオノマトペを聞き、積極的に母語と照らし合わせ、ときには母語との共通点に驚き、ときには想像もつかなかった違いに爆笑していた。また、自分の母語のオノマトペが他言語話者の参加者にどのように聞こえるのかを聞き、興味を示していた。それは、日本の学生と西アフリカの学生の間だけではなく、西アフリカの学生同士でも、国や地域によって言語が違うことから、お互いの言語の共通点と違いを発見している様子がうかがえた。

### 3) 学生主導のイベントへの展開

2023年2月に交流に参加していた学生たちの提案によって開催されたイベント「私たちの本当を知って、見学SHOW!!」には、京都精華大学の学生・関係者約50名と、カメルーン、ブルキナファソ、セネガルの学生・関係者約10名が参加した。以前にも京都精華大学と西アフリカ間の学生交流イベントは複数回開催されたが、いずれも教員主導のもので

あった。学生が参加しやすいイベントをしたいという学生の提案を受け、学生が主体的に交流する時間をつくる事が、自分事として捉え、研究の内容を深めるものだという考えから、京都精華大学の学生主導で企画・運営を行なった。また、学生の「開かれた空間でおこなうことで、当事者以外の学生、教職員にも関心を持ってもらいたい」という意見から、教室ではなく、人通りの多い本館前のスペースを会場にした。

学生が各地域の「本当」を学ぶことを目的に企画された本イベントの内容は、Zoomで各地を繋ぎ、精華大学生が持っている「アフリカ」のイメージをイラストを用いて口頭でプレゼンし、各地域の学生を通して理解の違いを知る、それをYouTubeコンテンツのように枠を作り配信するというものであった(図7)。この内容は、研究会のミーティングで学生がおこなったアイスブレイクの内容を原案にしている。

イベントでは、アフリカの動物から食べ物、楽器、ファッションなど、多様な絵が登場した。その場面はZoomで西アフリカの大学生と関係者にリアルタイムで配信され、西アフリカの学生からの反応とコメントが画面やチャットで見られた。また、イベント全体の様子は本館の壁に投影され、参加者や通行人も見ることができた。学生の説明は教員が通訳したが、絵とともに説明を行ったため、言語だけに頼らず、イベントを運営することができた。

本イベントの最も注目すべき特徴は、前述したように、学生主導のものだという点である。学生のアイデアを原案にし、学生に当事者意識を持ってもらったことは、企画立案、当日の進行、役割の分担、必要機材の確保、など主体的な活動に繋がった。これが大きく影響し、(画面越しではあったが)参加者同士の心の距離がより縮められたと考えられる。教室など「閉じられた空間」ではなく、誰でも参加できる空間で活動を共有したことで、学内だけでは



図7. 「私たちの本当を知って、見学SHOW!!」

無い国内外の馴染みのない文化への関心をさらに促進できた部分がある。また、それまでの交流イベントに比べ、幅広い層の学生に参加してもらうことができ、国際交流の楽しさを多数の学生に伝えられたのも成果の一つだったと言える。

#### 4. 考察

本稿では、2021年度、2022年度に実施した本学と西アフリカの諸大学との交流事業を事例に、多言語状況における遠隔地との交流のさまざまな可能性を検討してきた。交流事業では、言語障壁を克服する方法として、言語を用いない交流のあり方が模索され、地理的距離を縮める方法として、オンラインでの交流の可能性が検討された点が特徴的であった。一方で、既述のように言語を中心とした交流もとりわけ初期の段階では重要な位置を占め、交流形態もオンラインの配信型から、SNSを使った時間差での交流、贈り物を介したオフラインの交流、さらには実際に現地を訪れた対面での交流まで多岐にわたった。

以下では、本プロジェクトを通して明らかになったことを、①コミュニケーション手段(言語中心の交流／非言語中心の交流)、②交流形態(オンライン交流・もののエクステンジ・オフライン交流)、③交流の教育効果、④国際事業における位置づけの四つの観点から考察する。

##### ① コミュニケーション手段

###### (言語中心の交流／非言語中心の交流)

多言語状況における交流では、複数言語を扱うことのできる媒介者の役割が偏重してしまいがちである。とりわけ媒介者が教員である場合、プロジェクトにおける学生の主体性を引き出すことが困難になる。また、プロジェクトが特定の媒介者の参加を前提とすることとなり、持続性・汎用性のあるモデルの構築にはやや不適である。さらに、通訳を介してのコミュニケーションは、同時性を低下させ冗長になりやすいため、参加人数を限定せざるを得ない。一方、同時性については、オンラインでの交流の場合、チャットツールを駆使することである程度は冗長性を回避することができる。また、実際の交流では、コミュニケーションの時間差を埋める行為として、参加者が自発的にチャットツールを利用するという状況が発生し、さらに翻訳アプリを利用する「直接」のコミュニケーションを促進することがで

きた。このように、限界を孕んだ交流環境が、参加者の想像力を促し、障壁を自ら克服していく助けとなる事例は、国際交流のあり方を考えるうえで重要といえよう。

言語を介さないさまざまな形態の交流方法の模索も、こうした障壁を克服する手段として、プロジェクト進行過程で内発的に生じたものである。一方でことわざやオノマトペの比較といった、言語の差異そのものを対象化した交流は、多言語状況の特性を活かしたものである。上述したように、イベント「アフリカのオノマトペを学ぼう！描こう！」や「私たちの本当を知って、見学SHOW!!」では、絵を利用し、言語にあまり頼らないコミュニケーションによる交流を試みた。この二つのイベントを通じてわかったことは、言語によるコミュニケーションを最小限にする場合、媒介者(通訳・翻訳)の協力をあまり必要としないため、参加者間のより直接的な交流を誘導しやすいという点である。また、カジュアルなテーマのイベントだったため、絵を描いたり、他人の絵を理解しようとしたりする過程をゲームのように楽しんでもらえたのも、絵を用いたコミュニケーションの利点だと言える。一方、参加者の画力に差があるため、参加者によって表現できる範囲が異なることはインタラクティブなコミュニケーションを妨げる要素になりうる。さらに、一枚の絵だけでは深いコミュニケーションが難しいことや、このタイプのイベントの場合、テーマや交流のルールを事前に決めておく必要があるため、連続的な交流よりは単発のイベントに向いているという点でも言葉を媒介としない交流には、一部限界がある。言語ベースのコミュニケーションと言語だけに頼らないコミュニケーションが両方必要だと考えられる理由である。

##### ② 交流形態(オンラインを中心とした交流からオフラインへの移行)

本プログラムでは、オンラインの交流を主な活動としたが、同時にフィジカルな「もの」のやりとりを通じた交流を行ったことは、本文で述べた通りである。また、学生の一部は交流後にフィールドワークの渡航を通して、実際現地の学生と現地にて直接交流する機会が得られた者も複数人いた。オンライン交流の難点としては、参加者の声のトーンや微妙な表情の変化、ジェスチャーなどによる非言語コミュニケーションの可能性が減ってしまう点が挙げられる。また、遠く離れた国や地域の人が実際に会っ

て空気感を共有しながらコミュニケーションを取ろうとする行為自体が多くの発見をもたらすということを考えると、オンライン交流はオフライン交流に比べ、多くの困難が伴うことが多く、得られる情報量も限られるといえる。しかし、国を跨ぐオフライン交流の場合、多くの費用や時間がかかるため、簡単に実現できないことから、オンライン交流のメリットは少なくない。例えば、既にお互いの面識があり、言語を介したコミュニケーションに抵抗がない教員同士においては、オンラインでの事前打ち合わせが本プログラムを進める上で非常に有用だった。しかし、一部の学生にとって、共通の言語がない参加者間の交流を行う場合、実際にコミュニケーションを取る過程が大きなストレスになる可能性もある。逆に、直接相手と対峙する必要が無く個人間の会話が少ないオンライン交流は異文化コミュニケーションに慣れていない人でも気軽に参加できる、入門者にやさしい特徴があると言える。

このように、オンラインとオフライン交流にはそれぞれ異なる特徴があり、どちらかがより効果的とは断言できない。オンラインで交流を始め、面識を得て、機会があればオフライン交流でより親交を深めるなど、オンラインやオフラインを適切に利用することで、交流の質を高めることができると考えられる。実際、オンライン交流会に参加したあと、セネガルでの海外ショートプログラムに参加し、現地でオフラインの交流も経験した学生の満足度は非常に高かった。

### ③交流の教育効果

学生の留学経験は、卒業制作など今後の制作や進路に大きな影響を及ぼすことがしばしば見受けられる。クリエイティブな活動にはユニークな体験が欠かせないが、留学を希望する学生の数は多くない。一方、本交流事業の開始時に参加学生を募ったところ、予想を上回りすべての学部から合計23名の学生から応募があった。学生らは、「アフリカに関心がある」、「仏語や英語を学びたい・活用したい」、「海外の文化を知りたい、海外出身者と交流がしたい」、「制作の糧にしたい」などの関心とともに、「大学のプログラムだと安心」「サポートしてもらえることが魅力的」「大学から参加できる」という交流プログラムの特性を参加理由とした。これらを背景とし、本学の特色である制作系学部と人文系の学部を設置している状況に即し、一般的な語学をベースとしたコミュニケーションに拘らずあらゆる手段を講じて

コミュニケーションを図った。これらに鑑みると、馴染みのない文化に対して関心を有する学生が少ない数潜在しており、参加しやすい場を創出することにより、学生が第一歩を踏み出す機会となり得ることが確認された。

一方で、フランス語系の専攻を設置している大学と比べると学生の語学力向上の意欲は小さかったと感じられる。また、イベントへの参加やギフト・エクスチェンジといった体験は制作活動などに影響を与えているとは考えられるが、より深い体験を提供できるよう検討する必要がある。しかしながら、少数ではあったものの、1年次から本プロジェクトを通してセネガルの学生と交流を深め、3年次にはセネガルに留学し、今後も西アフリカと関わっていきたいとの意欲を示した学生もいた。その学生は留学中に現地ビジネススクール内の日本語クラブを取りまとめ、本学とのオンライン交流イベントを企画した。このようなイベントを日本側で体験した学生が、次はアフリカ側で参加するような好循環が生まれることを期待するとともに、オンラインにおける交流事業が一時的な体験に留まらない機会創出やサポートも必要であろう。

### ④国際交流事業における位置づけ

多言語（仏、英、日）状況における大学レベルでの交流について、とりわけ西アフリカの参加校の側から大きな関心が寄せられたことは強調したい。通常、言語の差異と地理的距離は、共に大きな障壁と捉えられがちであるが、西アフリカ地域においてはそれを上回る国際交流の需要があり、なかでも日本は新しい連携先として各大学において重視されていることが明らかになった。日本の大学においては、西アフリカ仏語圏との大学との交流は限定的であるため、本交流事業を起点とした学生交流はその先駆けとなるものであり、今後の当該地域の大学との教育・研究連携の促進に寄与することが期待される。

また、本学の国際交流事業の観点からみると、図8で示すように、例えば、教育面においては、語学習得、多文化共生教育、卒業論文や制作物への影響、本学学生の留学意識の醸成、大学の国際化においては、海外協定校との交流と協働の活性化、本学への留学希望につながりうる連携大学における本学の認知度の向上など、項目ごとに影響の度合いは異なるが波及効果があったと考えられる。オンラインによる交流事業には上述したような課題はあるものの、経済的な制約は少なく、ニーズに合わせて交流方法

を展開することによって、多くの学生や教職員の関与が可能な国際交流の一つであり、コロナ禍による制限が解除された後においても、国際教育の実践や大学の国際化を促進する一助となる可能性があることを示唆するものである。

藤枝絢子, 阿毛香絵. オンライン多文化環境の協働における学び: 2022年Shared Campus サマースクール「Streets: 街路で考える」を事例として. 京都精華大学紀要第56号. 2023, p. 253-263

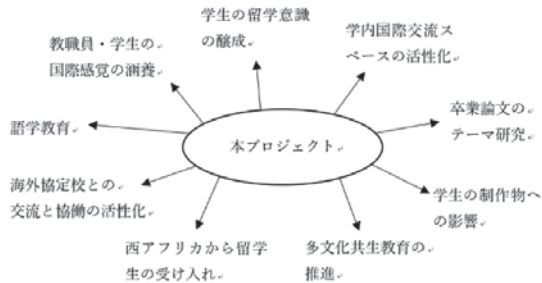


図8. 大学の国際交流事業への波及効果

### 参照

(1) 例えば、セネガルでは初等、中等教育において日本の近代史や戦後史について学ぶため若者は日本について身近に感じている。しかし、こうした日本に関するイメージや教育が、主に1990年代から2000年代のマスメディアや西洋の研究から借用したものであり、近年の日本の現状と乖離してきていることも指摘されている。Timera (2012) を参照。

### 参考文献

Takanori Oishi & Chihiro Kumashiro eds., Inbetween Africa and Japan. Stories of Study Abroad Experiences 2016-2020, Tokyo University of Foreign Studies, African Area Studies, School of International and Area Studies, African Studies Center, IAFP Kick-Off Joint Conference on 25th March 2021. <https://www.tufs.ac.jp/iafp/wp-content/uploads/sites/16/2021/03/Inbetween-Africa-and-Japan.pdf>

Mamadou Bouna Timera, "Le Japon, objet d'étude et d'enseignement au Sénégal", *Cybergeog: European Journal of Geography*, 2012. <https://journals.openedition.org/cybergeog/25372>

佐藤誠. "日本のアフリカ外交—歴史にみるその特質". 『成長するアフリカ—日本と中国の視点』報告集. アジア経済研究所, 2007年9月

内閣府. "特集1 日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～". 令和元年度版 子供・若者白書. 内閣府, 2018, p. 2-18

平野克己. 経済大国アフリカ 資源、食糧問題から開発政策まで. 中央公論新社. 2013